

Title	シュティフターの文芸書簡：『習作集』・『短篇物語』・『石さまさま』成立の考証
Sub Title	
Author	小名木, 榮三郎(Onagi, Eizaburo)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	2008
Jtitle	慶應の教養学：慶應義塾創立一五〇年記念法学部論文集 (2008.) ,p.179- 229
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BA88455348-00000012-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シュティフターの文芸書簡

——『習作集』・『短篇物語』・『石さまさま』成立の考証——

小名木 榮三郎

- I 序言・書簡集と研究の現状
- II シュティフターの書簡
- III 作品を語るシュティフターの書簡
- IV 現代の視点

I 序言・書簡集と研究の現状

アーダルベルト・シュティフターが生涯にわたり手紙を書き、その多くが『書簡集』として残されていることはよく知られている。昨今の電話魔、メール魔の病的状況からすれば、まさに手紙魔ともいうべき努力であった。没後から今日にいたるまで、大小の書簡集や評伝、伝記、ドキュメント資料となって公開されている⁽¹⁾。

シュティフターは若い時からよく手紙を書き続けていた。一部は自ら焼却したため欠落しているが、30歳代の初期になると、「自分の書いた友人宛の手紙をまとめて出版してもらいたい」⁽²⁾と望むようになった。また晩年の病魔と闘う1866年には、「自分の手紙の出版権を8000グルデン



Adalbert Stifter 1805~1868. Photo v. L. Angerer, 1863

で譲り渡し、自分の死後に出版する」ことで借入金を清算しようと目論むまでになった⁽³⁾。手紙を書いて世に残そうとの執念は、自分を取巻く大小の事件を事細かに描く行間からも、また芸術を通して自分の想いを繰り返し訴える、情熱をこめたその文章にもほとぼしり出るほどと読み取れる。

このような約1000通にも及ぶシュティフターの手紙には、青春の記念碑となる恋の行方、詩作の試みから、自分の人生への展望、日々の生活の喜び

と悲しみの吐露、作家活動を支える精神の高揚と実務の煩雑な仕事との揺れ動き、重苦しい勤務の間に迎えるポエジーの世界の輝き、来るべき時代への希望や祖国と民族の現状に対する怒りと空しい想いが、波のうねりのように次々と書き留められ、生涯の生活記録を提供している⁽⁴⁾。晩年には山荘から妻に日々の記録や感想を日記のように書き続け、いずれ自分の死後に遺族への稿料の一助となることを願い、書くこと自体が目的となったと考えられている。

筆者はすでに M. エンツィンガーの評伝『アーダルベルト・シュティフター——生涯・作品・書簡——』を翻訳し、その冒頭における解説で⁽⁵⁾、この作家の残した書簡の意義を今日の研究状況とどのような関連があるかを考察した。

このような作家の人間像を伝える書簡の中で、シュティフターが自作の文芸作品と関係する事情を、資料として如何に残したかが関心と呼ぶところである。しかしこれまで数十年にわたるシュティフター作品の研究を見渡すとき、書簡の一部分を文芸作品と関連した記録という視点からのみ、随意に取り上げることはあっても、多くは作品執筆の機縁とか、作者の本来の意図を探ることに限られていた。では残された膨大な手紙の全資料を検討し、作品との直接、間接の関連した具体像を総合的に整理した報告がなされたかという、残念ながらこれまでのところ空白のままとなっている。書簡はすべて単なる生活の記録であるとか、また作家の仕事の二次資料である、との考えが強いからであろう。「プラーク版全集」Adalbert Stifters Sämtliche Werke, Prag — Reichenberger Ausgabe (以下 PRA) の XVII — XXIV に集められた「往復書簡集」全八巻の第 6 巻巻末には、作品との関連が 90 頁もの「索引」にかなり詳しく項目毎に、関連も含めて記録されてはいるが、「作品」の項目に集められた 14 頁にも及ぶ綿密な資料を用いて、深い考察を伝える報告はなされていない。

本稿ではこのようなシュティフターの書簡についての研究状況の中で、文芸諸作品と書簡との関連を考察し、この作家が自分の作品に寄せる生の声を、深層心理の見せる仮面と本音を聞き分け、作品に寄せる本来の意図を確認してみたいと思う。もちろん自己証言の意義と価値については、多くの場合に

客観的資料としての疑念が少なからず問題となろう。ここでは資料となる書簡の伝える内容を、叙述と状況の背後から考察して、作品への意図、作品の成立、作品の修整などとの関係を捉えようと努めた。

考察の資料には「ブラーク版全集」PRAの「往復書簡集」1—6シュティフター発、7—8シュティフター宛を用いた。XVII巻：2版1929、XVIII巻：2版1941、XIX巻：2版1929、XX巻：1925、XXI巻：1928、XXII巻：1931、XXIII巻：1939、XXIV巻：1939。

文芸作品の資料には1978年に刊行を始め、現在も進行中の「シュティフター 作品と書簡」大全集 Adalbert Stifter Werke und Briefe. Historisch — Kritische Gesamtausgabe. Stuttgart（以下HKG）を用いた。

Studien：Journalfassungen 1,1~1,3; 1978, 1979, 1980; Buchfassungen 1,4~1,6; 1981, 1982, 1982; Hrsg. v. Helmut Bergner u. Ulrich Dittmann.

Bunte Steine：Journalfassungen 2,1; Buchfassungen 2,2; 1982; Hrsg. v. H. Bergner. Erzählungen I, II：3,1, 3,2; Hrsg. v. Sybille von Steinsdorff u. Johannes John, 2002, 2003.

II シュティフターの書簡

晩年の病状が悪化する時期になると、シュティフターはボヘミアの森のラッケンホイザーに借りたローゼンベルガーの別荘から、連日のように、時には日に二回も、妻アマーリアに自分の身体と内心の状況を書き送り、繰り返す妻への愛情の変わらないことを訴え続けている。「手紙を書くこと」が妻や姪に書簡の出版権を残し、親しい出版者ヘッケナスト Gustav Heckenast (1818—1878) からの公刊を予想していたのである。そのため手紙は公表を意識して表向きにもなり、妻との愛の固さを世に残そうとしたようにも受け取れる。実際その通りに書簡の出版は実現し、友人アプレントによる『シュティフター書簡集』3巻が世に出たのは没後1年経った1869年のことであった。これにはまたヘッケナストからの稿料の前借りを埋め合わせる事情もあった。親友のセレクトした書簡集の内容は、死の翌年のことでもあり、また故人への友情厚い思い込みもあって、かなり私情を織り込んで、不都合と

思われる部分を取り去り、新たに書き加え、書き改めた内容も少なくなかった。結局はアブレントの畏敬の念を込めたシュティフター像を反映させることになった。

その後35年の沈黙の後に、シュティフターが眠りを覚まして世に迎えられたのは、ハイン Alois Raimund Hein の『シュティフター伝』によるものであった。しかしシュティフターへの溢れるばかりの愛着と情熱がこの伝記を被い、作品からの豊富な引用とそれを支える書簡の傍証がかなり恣意的に使われることになった。この「シュティフター再発見」の切掛けを得て、本格的に原典を基にして全集を出版するとともに、散逸した全書簡集を出版することになったのは、ザウアー August Sauer の PRA 版の八巻であった。ここに集められたシュティフターの手紙の一覧を見ると、圧倒的に多いのがハンガリーのベストで活動する出版者ヘッケナスト宛のもので、264 通にも達する。全書簡の三分の一に近い。次に多いのは妻アマーリア宛で、ベストの編集者宛の半分にも達する。もっともここに提供された資料となる書簡の多くは、ヘッケナストの妻の保管によるものであるし、また他方、作家の妻アマーリア宛も、当然のことながらその手許に残されていたものである。残りは郷土の親戚・縁者・友人宛のものであり、またさらに作品の出版に関わる挿絵画家、銅版製作者、および視学官としての仕事で日常生活に関係した人に宛てた手紙である。

ゲーテ・シラーの往復書簡のように、意識して芸術上のテーマに関わる対話を手紙によって公刊した場合でないと、書簡の資料は世に伝えるほどの価値を持つのは限られている。書簡の形式に託した文学表現は次元の違う世界なのである。したがってシュティフターが重い病に臥し、自身の行く末を案じ、残る家族を思って、書簡を集めて版權を友人に託す状況にいたったのは、特別な詩的動機があったとは認めがたい。しかし「後の世に手紙を残す」と心に決めてからは、まるで日記をつけるように妻に宛てて自分の想いを伝え続けたのである。たしかにそこに書かれた日々の記録内容は、人間シュティフターの実像を形作る上では大いに役に立つし、後の世に伝記の資料を残した。初めてトリエステで海を見たときの感動とか、ワインやビール、食事への執着の強さ、身内の行方不明者・投身自殺者への悔悟の念の深さを読み取

れるが、いずれも文学作品への決定的な意義は必ずしも大きいとは言えない。むしろバイエルンの森での恐ろしい吹雪の荒天を体験した1866年11月のラッケンホイザーからの書簡は、異常な事態における内心の動揺を詳しく伝え、「白い闇」の世界を報告しているが、これはむしろ例外で、非日常を体験した作家の筆が生んだ特例と言えよう。

むしろ書きたいときに書きたいだけ書簡に書き綴り、執念を込めた作品『晩夏』Der Nachsommerの執筆に心血を注いで百年後の世に訴える姿こそ、世間から醒めた眼にさらされるシュティフターが、最高の理解を相手から得ようとする晩年の生き方を映すものであった。かようにこの作家が自己の生命を掛けた文学の世界と対話できるのは、編集・出版者のヘッケナストと語り合う時だけであった。その多くの場合は書簡の上であり、しかも最初に原稿の遅れを気にしながら、自己の生活に関わる事情を語って弁明を始める。さらに如何に自分が仕事を抱えて多忙であり、しかも作品を書くという、本来の自分の仕事に没頭できない苦痛に耐えているかを訴える。そして自分が取り組んでいる作品が如何に良い出来であり、多くの読者から好意を持って迎えらるることであろうと、自信のほどを大きく展開してゆく。それに加えて新たな作品の具体的な構想を長々と述べ、この友人・編集者の気を引こうと努めているのは、いつも繰り返されるパターンとなっている。しかしその作品構想の優れた点をたっぷりと語り尽くした挙句に、毎月の手当てを増額してもらいたい、あれこれの理由から前借りをしたいと要求する件りに達すると、その素晴らしい作品への構想は、実は借金の前口上であったのかと疑いたくもなる。若干の手紙をのぞき込むだけの者には、この作家の真意を適切に読み取れないのではないかと思われる。

しかしいつも金に追われる日々のためとはいえ、自らの作品を語り、物語の魅力をうっとり書き連ねる情熱が行間にみなぎり、読む者の心に強く訴える力を持つのは明らかである。出版者ヘッケナストも経済的負担と得られる利益を天秤に掛けたとしても、その心情に脱帽したものと思われる⁶⁾。シュティフターが1841年に青年作家として『コンドル号』で世に温かく迎えられ、魂に触れる美しい作品を書いて、次々と雑誌に発表して以来、切れることなく二人を結ぶ書簡こそ、生涯繰り返され続けた「作家と出版者」の関



M. M. ダッフインガーによる水彩画（1846年）

係を映す独自の世界なのであった。

このようなシュティフターの書簡の持つ特性を改めて全体像として考察するとき、1000通にも及ぶ多量の書簡を読むと、伝記の資料となる日常生活における大小の公私にわたる関心事の記録のほかに、また一方では作家として、書簡を公刊して遺したいとの願望、作品執筆情報の伝達、さらに自己告白、自己懺悔を実現する場となった書簡が数多く見受けられる⁽⁷⁾。そこで本稿ではシュティフターの残した文芸作品を主題にし、作品に光を与える言及を手がかりに、書簡資料から、作品の基本構想、成立時期、内容構造、改作

などを考察し、あわせて自己証言の可能性についても考察を深めたいと思う。

まず第一回として『習作集』、『短篇物語』、『石さまさま』の短篇小説を考証し、次に『晩夏』、『ヴィティコー』の長篇小説を取り上げる機会を得たいと思っている。

Ⅲ 作品を語るシュティフターの書簡

本稿では特にシュティフターの短篇小説集『習作集』、『石さまさま』と独立の『物語作品』をテーマとした書簡を取り上げ、それぞれの作品ごとに、年月順に記録・整理した。この分類された各書簡の主な趣旨を、作品の成立過程との関連に注目して考察したものである。なお分類した書簡の大部分はシュティフターが友人の編集・出版者であるグスタフ・ヘッケナスト Gustav Heckenast に宛てたものである。煩雑になるのを避けるため、分類表では Heckenast のみを記し、その他の場合には宛先の氏名を明記した。書簡の引用は PRA 版の表記を用い、書簡番号、全集の巻数、引用頁を示した。作品名の邦訳は拙論『自然と対話する魂の軌跡——アーダルベルト・シュティフター論——』（1994年）の統一表記に従った。

A. 『習作集』 *Studien*

『コンドル号』 Der Condor

1846年：11月16日 H. Meynert? (Nr. 79)；

いわゆる出世作となった作品発表の経緯をさりげなく描いているのが1846年11月16日の書簡で、たびたび伝記の資料に使われている。

「私は若いときから大詩人にはひどく気後れして何か書いたものですが、やっとそれが活字になりましたのもやはり偶然のご縁でして、私がいرونなものを書いているのを、亡くなられたミンク Münk 男爵夫人がお察しになられ、サロンの例会の席で雑誌のヴィットハウアー Witthauer さんをお願いして、載せてもらうようにと私に勧めてくれました。それが『コンドル号』です。この時から執筆のお話が来るようになったのです。」(Nr. 79, XVII; S. 187)⁽⁸⁾

『野の花』 Feldblumen

1841年：3月6日 Heckenast (Nr. 25)；

1851年：9月26日 J. Mörner (Nr. 208b)；

次に発表した『野の花』については、内容について深く触れていない。作品の稿料を受け取ったことだけに終り、自分でもこの作品に対する反省を書簡にのぞかせている。「私には思いもかけない好評を当地の各誌に寄せていただいた」としているが、実は大いに反省し、「色気たっぷりに気取った跳ね廻り」の作品と見て、それとは大いに違う次の作品の売込みに努めている。(Nr. 25, XVII; S.74) それだけに次の物語の刊行が遅れることは非常に気になるところで、心は次の作品『密猟者』 Wildschütz の内容と締切りに移っていた。

10年後の1851年に、メルナー J. Mörner 宛書簡でふたたびこの作品の主人公を話題にしている。この人は二人のご婦人の絶讃するこの作家をウィーンに訪れたが、すでにシュティフターはリンツに移り住んでいて、北ドイツからの訪問者を迎えられなかった。返事の内容は、ちょうどリンツで実業学校設立に関わり、学校教育の理想像にのみ頭は燃えているところであった。シュティフターは「純粹」、「崇高」、「高貴」、さらに「喜び」、「温かみ」、などの理念をたっぷりと展開した文に続けて、自宅や郷土オーバーエスタライヒの素晴らしさを自慢している。「ドナウ河沿いの窓から素晴らしい丘陵の連なりを望むこの家には、わが愛するしっかりとした立派な妻が住む」と描き、この自分の妻をさらに「『野の花』のアンゲラのように、財産と知識はそれほどでもないが、優しさと純真な気持ちはそれを超える」(Nr. 208 b, XVIII; S. 90) と、大いに褒め上げている。「私はとても詩人なんかではありません。詩人とは純粹なもの、崇高なものですし、我々を高め、浄化する存在なのです」(Nr. 208 b, S. 88) と謙虚な態度で自作への賞讃に應えていたが、こと郷土とか自宅、それに妻を誇らしげに語る時のシュティフターは、まさに時の売れっ子肖像画家ダッフィンガー Moritz Michael Daffinger の描くような「可愛い青年作家」(186頁参照)へと様変わりしていた。

『荒野の村』 Das Haidedorf

1844年：9月22日 Anton Stifter (Nr. 50)；

五歳下の弟アントン Anton Stifter へ 1844年9月22日に書いた書簡で、『習作集』の第1、2の巻を兄弟として贈呈した際に、作品の内容と狙いを伝えようとしている。

「君には『荒野の村』に見られる親らしい感情と子供の気持ちが解ることでしょう。この作品で心に思い描いたのは、私の母、私の父なのです。物語に描かれている通りに、この地域にかくも心を寄せる貧しい人々の間に流れる愛情すべてが、この小物語に残すことなく収められています。これは文芸の世界への愛情のため、花嫁の愛情を犠牲にして、神さまの与えてくださったものに満足し、両親の許で暮せる幸せな男のお話です。」(Nr. 50, XVII; S. 129)

『深い森』 Der Hochwald

1841年：3月6日 Johann Mailath (Nr. 25)；8月2日 Heckenast (Nr. 28)；

12月28日 Heckenast (Nr. 35)；

1846年：3月17日 Heckenast (Nr. 63)；

1852年：6月16日 Heckenast (Nr. 225)；

1860年：3月7日 Heckenast (Nr. 419)；

前作の失敗を埋め合わせようとして、「おだやかな語り口で話を進め、素直で美しい流れ」を書きたいとして、『野の花』の独りよがりを引き合いに出し、原稿の「磨き上げ」にシュティフターは努めた。

「『密猟者』の原稿はすでに1月15日には完成していますが、私の手許にある限り「磨き上げ」をして、切り詰めたいと思い、その結果、全面改稿となってしまい、今その最中です。私の予定からすると、4月半ばには完成しますから、正真正銘の誓いの約束で、5月1日には発送します。検閲の点は心配ないし、問題となる言葉は入っていません。」(Nr. 25, XVII; S. 73)

ここには早くも「磨き上げる」(feilen) 作家シュティフターが顔を出して

いる。

この作品を執筆した時には『野の花』への反省から、かなり物語の展開の流れに気を使って、「私は愚かにもこの『深い森』のシーンのいくつかで、我ながらジーンときて心を動かされ、嬉しくなったりしました」(Nr. 25, XVII; S. 74) とほろりとした心情を語っている。このためであろうか、編集者のマイラート伯の求めるように、文芸年鑑『イーリス』Irisの1843年版に先送りするのではなく、42年版の年鑑でぜひ出してもらいたいと固執している。その自信に満ちた物語の出来栄は「ティーク (Ludwig Tieck、ロマン派作家) 以外には書けない」ほどの作品と自画自讃し、「この小説は心のこもった温かい物語であり、優しい心を持った読者の心をしっかりと捉えることでしょう」(Nr. 28; XVII S. 79. 80) と長所の説得に努めている。

しかし1846年に『習作集』第二版が出たときに読み直してみると、「もうまったく気に入りません」と作品の価値を認めなくなった。「第3、第4巻の方がずっと良い」と思うのは、後の作品への執着か愛着によるとはいえ、すでに作者の心はこの作品から離れていることを伝えている。さらに1852年に単行本で出版された時には「『深い森』を4部受け取りました。第1章は誤植がいくつか見受けられます。その先は読んでいません」(Nr. 225, XVIII; S. 114) と自身でも拒否反応を見せている。

さらにこれが決定的な作品への非難に変わったのは、1860年の『ヴィティコー』Witiko執筆に際しての反省であった。

「歴史の重さを痛感し、若いときの軽率な考えから、事実を捻じ曲げ、ファンタジーの抽出しへと押し込めてしまったのです。」(Nr. 419, XIX; S. 223)

若気の至りとはいえ、歴史の素材を安易に自分の想像の世界に織り成したことを恥じ、民族の歴史の重さを事実の積み重ねで語り継ぐ物語『ヴィティコー』を前にして、生涯の大作を執筆しようとするシュティフターが、軽率な青春時代への懺悔を語る書簡である。発表当時は大いに評判になったこの作品であったが、シュティフターにとっては、苦い青春の薬として記憶に深く刻み込まれることになる。一般大衆の間ではしかしポヘミアの作家の代表

作はやはり『深い森』であることは変わらないようである。

『痴人の館』 Die Narrenburg

1841年：12月28日 Heckenast (Nr. 35)；

1842年：1月24日 Heckenast (Nr. 36)；5月27日 Heckenast (Nr. 40)；

11月27日 Heckenast (Nr. 43)；

1844年：12月25日 Heckenast (Nr. 52)；

1846年：12月28日 Heckenast (Nr. 85)；

作品の内容に関する事項はあまり見当たらない。原稿の完成や発送の時期が問題となる。『ウィーンとウィーンの人々』Wien und die Wiener in Bildern aus dem Leben. Pest, Hrsg. v. Heckenast 1844の原稿と稿料に関するかなり詳しい書簡（1841年12月28日）の終りに、この作品の完成時期と分量に触れているに過ぎない。書簡の伝えるところは、執筆の心が次の作品へと移ってしまったのを洩らすのみである。

「私はこのところ愚かにも『痴人の館』と『書類綴じ』に同時に取り組んでいました。このため両方の一部分を完成させたのです。[……]第一章が傑作の出来栄えとなりますよう望んでいます。」(Nr. 43, XVII; S. 117)

しかしこの頃のシュティフターは創作意欲に燃えて、次々と作品の名が雑誌を飾る時期でもあった。『白いマントの印象』Wirkungen eines weißen Mantels（後に『石乳』Bergmilchとして『石さまごま』の一篇に）、『姉妹』Die Schwestern（後に『二人の姉妹』Zwei Schwesternとして『習作集』に）、『森の小道』Der Waldsteig（後に手を入れ『習作集』に）なども誕生した。さらに1846年3月17日の書簡には『森を行く人』Der Waldgänger、『聖夜』Der heilige Abendの執筆も予定にあげている。まさに売れっ子の人気作家となり、原稿の注文も、作品の構想も、よどみなく湧いてくる時期なのであった。

このように売出し中の人気作家となったシュティフターも、自分の作品への書評が気になるところで、『ウィーン新聞』Wiener Zeitungに出た作家ザイドル Johann Gabriel Seidl の論評を取り上げている。

「評者が大変くわしく取り上げるのは、いかにしてこれらの作品が成功を収めたかです。クラウツァール氏はきわめて真面目なビジネスマンで、就寝の際にこの物語を読み始め、一晩で一気読み終えたというのです。このような事実は熱狂的なファンの一ダースよりも私を喜ばせてくれますよ。このことは私の執筆に拍車をかけ、全霊をかけてこの拍手に応える立派な仕事を、と思わせませぬ。」(Nr. 52, XVII; S. 133)

この物語の名がさらに出てくるのは二年先のことで、「『プロコプス』 Prokopus を執筆しましたが、『痴人の館』の話からの作品です」(Nr. 85, XVII; S. 198) と触れるのみである。

『曾祖父の書類綴じ』 Die Mappe meines Urgroßvaters

1842年：11月27日 Heckenast (Nr. 43)；

1844年：12月25日 Heckenast (Nr. 52)；

1846年：11月3日 Heckenast (Nr. 77)；11月16日 Heckenast (Nr. 78)；
12月28日以前 Heckenast (Nr. 85)；

1847年：2月16日 Heckenast (Nr. 90)；3月1日 Heckenast (Nr. 91)；

1857年：12月16日 Heckenast (Nr. 362)；

「私の曾祖父の書類綴じに残された遺稿」という趣旨のこの物語は、シュティフターが生涯にわたり温めたテーマである。時間を置いて何度も書き改め、年齢とともに自分の生涯の歩みをこの物語に語らせている。最初の作は『ウィーン芸芸誌』Wiener Zeitschrift für Kunst, Literatur, Theater und Modeに1841年に発表され、後に大幅に修正の手を加えて、47年に出版された『習作集』の第3、4巻に収められた。現行の新全集HKGの分類による「雑誌稿」Journalfassungで90頁、「書籍稿」Buchfassungで223頁と約2.5倍に増えている。この雑誌稿と書籍稿との分類に反対し、別々の作品と見るべきだとする人もいるが、この比較によって大きな変わり様が推測されよう。この後さらに1864年に第三回目の改作を試みたが、作品にまとまることはなか

った。第四回目の稿によって完成させようとしたが、病気により未完に終わり、絶筆となった。

まず初期の書簡で問題となるのは、Ur-Mappe『原初稿マップ』と Studien-Mappe『習作集稿マップ』の違いである。Nr. 43 の書簡はこの間の執筆の経緯を具体的に語っている。「『書類綴じ』で第3巻は始まる」と『習作集』に載る作品の配列構成を定めているが、これは第1、2巻の作品のテーマとの違いをはっきり意識し、この作品を特別な構想の下に仕上げようと期していることを示している。

さらに二年にわたり文芸誌などへの創作発表と、『習作集』への旧作改稿の仕事を重ねた後、『書類綴じ』の新たな構想による仕上げの状況を伝えているのは Nr. 52 の書簡である。

「『書類綴じ』原稿を小包で三折り（訳註：印刷全紙判の3枚分、72頁にあたらう）送りました。もう次の「マルガリータ」Margarita の章も出ています。これは今までと違うので友人の前で朗読し、全体の統一を図り仕上げの磨きをかけました。」(XVII; S. 132)

すでに述べたように、『習作集稿』は大幅に作品の内容を修正し、『原初稿』にない新たな章を加えている。「誓約」Gelöbniß の章一枚分を追加しているが、「心の優しい大佐」Der sanftmütige Obrist は逆に前稿より引き締めている。

「「心の優しい大佐」の章は「誓約」が短いせいで、大変好評の拍手を受けました。この大佐の章はどうしてもみかげ石のように固く引き締めなくてはなりませんね。私はこのエピソードはクラシックと呼べる最初の作だと思っているのです。」(S. 133)

シュティフターの改作の筆は作品により濃淡の違いが著しい。この『書類綴じ』にはかなりの変更が見られる。「古い遺品」Die Antiken; Die Altertümer は6.5倍に増え、「心の優しい大佐」は26頁から17頁へと引き締め、

人の浮浪者の物語」Die Geschichte der zween Bettlerの章27頁は第二稿では消え、代わりに「マルガリータ」の章124頁が加えられている。ピルリングの話は「ピルリングに近い谷」Tal ob Pirling 9頁を加えた二章となっている。さらに第二稿には「結び」Nachwortの章を添えている。『習作集』第1、2巻の作品はほとんど手を入れてないのに対し、この『書類綴じ』では作品構成の違い、物語の簡約化、主題の移行、さらに物語の長さ、構成、文体の大幅な違いが具体的な形で明瞭に現れている。後の改作の特色をはっきり見せているわけである。

この書簡にはまたシュティフターならではの特別な顔がのぞいているのも見逃せない。それは新しい作品執筆の構想を歌い上げ、人気作家らしい仕事の並行状況をたっぷりと語った上で、その拳句に稿料の前借りを申し込んでいる。『アプディアス』Abdiasの原稿修整のため、「マルガリータ」の章は1週間のお休みとか、『名演奏者』Virtuosin（後に『二人の姉妹』Zwei Schwestern）の名を挙げ、『イーリス』のために書いて、「2月半ばに完成の予定で、1月15日には三分の一を送る」(XVII; S. 134)と自信に満ちた予告を華々しく披露した後で、細かい金の要求へと急転直下の変わり様を見せる。「売れっ子作家」と「貧乏作家」の顔は表裏一体となって、この時期によく見られるパターンとなっている。『プロコープス』、『聖夜』のほかにも新作を執筆中と売り込み、「100 fl. いや 50 fl. でも」と強く「稿料の前借り」を迫っている(Nr. 91, S. 213)。シュティフターにはもっとも脂の乗った時期と見られるが⁹⁾、実情は相変わらず金に追われる作家の懐が本音を語らせているのが解る。ほかにも「『習作集』の人気が出て客も多く、妻はその対応に気を使い、ソファを買いたいので、1月の2日、3日までに150 fl. を送ってもらいたい」(XVII; S. 134)とか、さらにまた自分の手許に『習作集』を二冊、また母に『ウィーンとウィーンの人々』を送ってほしいというように物品の援助を要求している。こうした執筆予定、生活費の窮状を訴え、「金送れ」で本音を伝える書簡が、その最後の締めくくりに花飾りを見せるのは「友情」の語であった。この書簡の終りにも三度も繰り返し散りばめ、「私からの畏敬の念ともっとも真心を込めた友情」で、この出版者に最高の敬意を示すのであった。生涯続く畏敬の表現の始まりである。手紙の書き出しも次第

に親密度を深める呼びかけに変わってゆき、最後の美しい結びに対応している⁽¹⁰⁾。

このように作品の改稿を中心に素顔を見せ、示唆するところが多い Nr. 52 の書簡である。

この二年後の 1846 年の手紙には、手間と暇をかけて作品の磨き上げに打ち込む自身の姿を描き出し、「ここに『書類綴じ』の印刷第一折りが来ています——中によく目を通しました。計算するのはとても難しい仕事でして、この一折りのためには倍の時間をかけました」(XVII; S. 179) と遅れに対する弁明と納得できる仕事を売り込もうとしている。

「あなたには私の苦労は想像できないでしょうが、未完成のまま、しかも解っていて未完成で手許から手放したんですよ。『書類綴じ』の第一折りの原稿を、私がこれまでやってきたように、綴字の全部を数えながら、容器を替えて注ぎ込むこの苦労を、私は一体どうして越えてゆけばよいのでしょうか——しかし私たちはこの悲しい状況から離脱し、自分の仕事に戻ってゆくことになるのです。」(Nr. 78, XVII; S. 182)

ここには「磨き仕上げる」仕事の実情が明らかにされ、書き換えのむずかしい作業、特に字数、行数も数えて行う細かい作業が書かれている。自筆原稿の入念な変更に劣らない校正時の入れ替え、差し替えの作業は、後年ますます強まり、『晩夏』、『ヴィティコー』には一段と激しく見せるようになってゆく。

この書簡ではさらに書き続けて、物語の完成のために刷り上りも全体の入念な検討に必要と、本心を明かしている。

「『書類綴じ』の印刷をどんどん進めて結構です。二折り分の原稿を毎週送ります [……] どうか印刷済みの折りを送ってくださるようお願いいたします。いつでも入念に読めますし、本筋でないことでも、矛盾するところがないようにしますからね。」(S. 182)

さらにこの年の12月28日の書簡には、作品の修整による内容の質の改変をたっぷりと語って、改稿の意図を明らかにしようとしている。

「手許に少々出来ています（18頁分）。今月中かおそくも1月半ばには仕上げておきます。『書類綴じ』だけで二巻にもなりますね。私も驚いています。私の考えていたドクトルの性格像は変えられませんね。さもなければ、薄っぺらな違った内容になるほかはありませんよ。月並みなノヴェレや短篇、恋愛小説の決まりきった話を引き伸ばし、ブラブラと続けなくちゃなりませんね。そうなりゃ本当のしっかりと型の決まった、何事もやってのけようという、善意に満ちた力強い男なんか書けやしませんよ。第六折りには私は満足できませんが、第七折りはとても気に入っていますよ。思い切って小さいことは変えてみます。第七、八折りの氷結の場面は評判になるに違いありません。初めの四折りを殿方の前で朗読したところ、大きく強い影響を与えました。この巻では若者が活動を終え、——どの真面目な小説にもあるように——結婚で結ばれて終りとなります [……] いずれ章の分け方を我々は協議してみたいと思います。」(XVII; S. 196)

ここで注目すべきは作者がドクトルの性格をしっかりと捉え、話を流行の通俗小説の世界に留めない決心を固めていることである。読者の求める、型の決まった小説形式を乗り越え、自己の文学世界を形成しようと、出版者に語りかけて理解を得ようとしているわけである。他者の存在を超えて気高く生きようとする人物像に深く心を寄せるシュティフターは、さらに森をひとり歩きゆく人を描き、ドクトルとの共通の世界をテーマとしている。

ありふれた筋の通俗小説ではない、と見得を切って書き上げたこの作品であったが、二ヵ月後の1847年2月16日の書簡には物語への深刻な疑惑に苦しむことを告白する。

「苦痛をあなたに伝えなければなりません。『書類綴じ』のことです。あれは救いのない話です。この作品は気に入りません。私にはとても美しく、心に深く訴える、愛すべき作品なのですが、『荒野の村』と同様に優しく、また独特な

作品となるはずでした。しかしもっと心に深く迫り、締った堅い型を持ち、雄大な造りになれば、純粹で、明澄で、全体を見通せるフォルムを得たと思いません。」（Nr. 90, XVII; S. 208）

作品を完成させた後に、このような厳しい辛い反省の言葉を訴えているのを読むと、作品にどれほど心を込めて向っていたのかが、うかがえよう。書簡はさらに続けて作品の内容に批判を加えている。

「私は人間の心が映し出す三つの性格をこの中に表現したいと思いました。それはよく見かける普通の出来事や生活状況からにじみ出てくるもので、素直さ、大らかさ、優しさです。——もしこれが成功すれば、この本はきっと偉大さ、素直さ、古代の魅力を見せてくれるはずですが。しかし実際はそうはゆきません。校正を読むと「恐ろしいほど退屈した」のです。読者はこれと違った判断をされるかもしれません。最初の二巻の時のように誉めてくれて、恥をかかせることにもなるかもしれないのです。その唯一の原因となるのは、事がどうなればよいのか解らずに、出来てしまったものに満足してしまうことによるのです。——私にはよく解っています。とにかくそこに淵が口を開けているのが見えています。そこに大きな山を投げ込んでいるので、もうこの大きな溝を片付けられない状態なのです。一番悪いのは、私の思うままに全部を造り出せると思い込んでいることです。すべて頭と心にあるものが把握できて、表現できると思い込んでしまうのです。——もし友情に満ちた清らかな時間に恵まれれば、全体をうまくまとめ、素直で、明澄で、見通し得る清涼の気が空気のように生れましょう。そうすれば読者はこの本を読み進み、よく見知った、愛すべき事柄を見出せば、春の陽光に輝く萌え出ずる空気に包まれて、幸福な気持ちを味わい、どうしてそのようになるのか、などを口にするこもなくなるのです。」（Nr. 90, S. 208 f.）

シュティフターは自分でも、考えた内容とずれた、ただだらと続くだけのこの作品の展開に苛立ちを見せているわけで、自分の作品に「恐ろしいほど退屈した」とはっきり述べているのは注目すべき告白である。この物語の出

来に深い絶望を感じて、また改めて根本からの改作を、心に決めるようになったのであろうと思われる。それは後に死の直前まで気に掛かる重大な課題であったことが、すでにこの時期から明らかになる。

「最初の四折り——ドクトルがしなかったのだから、首吊りの試みの部分は外すという例外を除く——はまずは良くできています。とくに大佐の物語は、彼の性格がベストなので良いでしょうし、氷壁の崩落およびマルガリータの出る場面は良く描けています。——ほかはどうでしょうか。ドクトルの帰省と父と妹との生活はまあ清らかですが、その後は空虚と荒廃が続きますね。」(Nr. 90, XVII; S. 209)

ここでシュティフターは編集・出版者を友人として頭の中にはっきりと意識し、作品を軸として対峙する二人の立場に考えを広げてこう語っている。

「しかし作家が出版者に対して、自作をけなして悪く言うなんて、滅多にない状態じゃないですか。けれどもこの出版者は私にとって友人であるし、私としては、出版者に向って、そんなことを口にしない友人として、語りかけているのです。私はこの本のことをどうしようもなく怖れています。これを書かないわけにはいかないのです。それはどうしても私の心の一面だと考え込んでしまいます。——どうかいま見ているこの未完の断片作品を、『習作集』の中に試作品として置いてください。私としては好意ある清らかな時間をかけて、この対象にしっかりとした仕事をして、一枚も原稿を人に渡さずに、作品全体を磨いて仕上げ、きちんと整え、完成させ、澄明な作品に仕上げ、あなたの手許に届けようと思います。そしてそれは二巻本の独立した作品となって、読者の前に提供されることでしょう。もしあの駄目な未完成の作が姿を変え、変らぬ粗末な姿のままで『習作集』の中に残っている場合には、それはもうまったく何の力もなし得ず、人々が——うまく成功しても——新しい作品の素晴らしさで、以前のものを読んでいたことも忘れてしまうことでしょう。ですから第5巻、第6巻は『書類綴じ』の続きではなく、別な物語を出して、全6巻の『習作集』を終りにしてください。」(XVII; S. 209 f.)

まったく意に満たない作品として自らに厳しい言葉を向け、一部の良いところは残しても、新たな物語作品に改作しなければ、『習作集』全体の水準に関わる問題と捉え、これまでの自分への評価にも、また前作から得た評判をまたも期待する読者の心にも、偽りのない誠意を持って、自分の納得できる内容を示したい、と意を固めたものと解してよいであろう。完成した原稿として提出しようとの執念がにじみ出ているわけである。

この後、ふたたびこの作品に触れているのは半月後の書簡で、3月1日に書いている。眼科医イエーガー Dr. Friedrich von Jäger 邸におけるサロンの席で、シュティフター作品への好評のシーンを描いている。同席したスウェーデンの歌姫ジェニー・リンド Jenny Lind（1821-1887）の見せる感動の涙によるものであろう。

「ご心配な点について説明しますと、イエーガーさんのところで第二折り、第三折りのところを朗読しましたら、たいへん良好な反響を得ました。近頃よくこのサロンでお会いする歌手のジェニー・リンドさんは涙をこらえきれず、ハンカチで目頭を押さえ、感情のこもった、語りかけるような眼差しを投げかけてくれました。私にとりましては、この芸術家のお嬢さんが美と節度ある道義を魅力的に表現するのを好ましく思っていました。この歌姫の拍手の方が、何事にも非常に口うるさく非難の刃を向ける批評家からの賛成の表現よりも、ずっと価値があると思えます。ご出席の皆さんはこの作品の続きを求めていましたが、たまたま私が第二、三、四折りを持参しただけでしたので、ご希望に応えられませんでした。ですから出来ますなら、第1、2巻の初版と、第3、4巻をリンド嬢に贈りたいと思いますから、友人としてご協力いただけないでしょうか。」(Nr. 91, XVII; S. 211)

シュティフターはこのストックホルム生まれの若い歌手にすっかり心酔していた。彼女の歌声も素晴らしいが、何よりも道徳に関する節度ある考え方に共鳴した。その考え方はシュティフターの作品世界の描く人物や、運命の展開に従う人生の生き方に沿うものであった。若い歌姫は人気作家の作品に

感動し、作家もこれを大いに喜び、二人の間には深い理解が生まれていた。

『書類綴じ』こそ私の可愛い愛児とあなたは申されますが、わたしにはあの歌姫こそ私の可愛い愛児です。清澄と崇高と美しさの最高を見せてくれます。」
(Nr. 91, S. 212)

と若い歌手を絶讃する気持ちを語っている。

この作品を改作する話は10年後にいたって二人の話題となって現れる。

長い沈黙の後に友人編集者に宛てた1857年12月16日の書簡は、入れ違いを怖れながら口を開くことになった。この時期にはシュティフターは歴史小説『ヴィティコー』を書き始めようとしているところであった。『晩夏』をようやく書き終えたところで、念願の郷土の歴史をヴィティコーを軸に、事実の重さに主題を置いて書こうという時期であった。

以前に次々と発表された作品の掲載誌を探し出してもらいたいとの希望に続いて、話題は『習作集』に移り、10年前にぜひとも改作したいと切望した頃の話に進んでゆく。

「もし三冊本の『習作集』がまた出版される場合には、どうか事前に連絡をしていただきたい。そうなると、『書類綴じ』もおそらく出ることになるでしょうが、同名の作品が加わることになりましょう。その場合には『書類綴じ』には以前二人が話し合ったように、第二部が続くことになるでしょうね。」(Nr. 362, XIX; S. 81) (Nr. 90 参照)

『アプディアス』 Abdias

1844年：7月17日 Heckenast (Nr. 48)；12月25日 Heckenast (Nr. 52)；

1846年：1月または2月 Heckenast (Nr. 62)；

『習作集』での配列順を指定し (Nr. 48, Nr. 52)、再度全体によく眼を通して二週間以内に送付すると報告。ガイガー Peter Joh. Nep. Geiger の挿絵「砂漠のベドウィン」を「最高の傑作」と絶讃 (1858年7月29日：Nr. 381)。

『古い印章』 Das alte Siegel

1844年：7月17日 Heckenast (Nr. 48)

『習作集』における配列順を指定。(Nr. 48)

『ブリギッタ』 Brigitta

1844年：7月17日 Heckenast (N. 48)；

1846年：10月18日 Heckenast (Nr. 76)；

配列順を指示 (N. 48)。しかしこの作品の不出来な状況に不満を抱き、修整を加えて送り届けている。その上で、物語の頂点と思う個所を明らかにし、この作品の出来栄を自讃している (Nr. 76)。作品への思い入れの強さを示す証言で、自慢の個所が示されている。

「これには不運と幸運がついてきました。不運は第4巻の終りの作品で、9月には完成して全体を読んだところ、どうも気に入らないのです——そこで新たに直したため、遅れてしまったのです。幸運なのは全部を見直し、ずっと良くなったところで、あなたにお届けできたことです。でないと悔いの残るところでしたよ。」(XVII; S. 176)

「ブリギッタの第3章、第4章は物語の輝く頂点でなくてはならないし、実際そう出来たと思っています。「回顧」の章を読んでみてください。それだけではなく、この物語は二巻（第3、4巻）の中で最高のものに違いないと思います。」(XVII; S. 176)

『老独身者』 Der Hagestolz

1844年：7月17日 Heckenast (N. 48)；

1846年：5月22日 Heckenast (Nr. 67)；

1858年：2月11日 Heckenast (Nr. 367)；7月29日 Heckenast (Nr. 381)；

1859年：2月2日 Heckenast (Nr. 391)；

この作品への強い執念を語る最初の手紙 (Nr. 48) は、まず9頁分の手稿送付で始まっている。

『老独身者』自身が「[壮大にして陰鬱な気分の立派な性格]を持つ作品となる予定です。けれども『イーリス』の枠を超えるほど膨らみ、初めの構想より短かくしようと努力しても、とても無駄でしょう。私としては作品全体を載せ、一巻の大きさになっても、元来の深さと訴える力を示して世に出せればと願っています。」(XVII; S. 122)

このように作品にこめた筆者の固い決意を語っているが、茫洋として続けられる物語には、必ずしも好評は寄せられていない。二年後の1846年には同時代の作家コリッシュ Sigmund Kolisch (1816—1886) が「ドイツ最高のノヴェレ」と賞讃してはいるが (Nr. 67, XVII; S. 164)。

『習作集』の好評はまた近隣諸国での翻訳も出るようになり、『深い森』、『アプディアス』、さらに『水晶』が翻訳された。その勢いでというべきか、この『老独身者』の仏訳“Le vieux garçon”, Le Prêz Schnee, Brüssel, 1858 も出ているが、シュティフターはこれに強い不満を口にしている。

「ブルユッセルのシュネー書店からは約束の小額すらも送ってこない。六部届けてきただけ。翻訳は改作であり、それにとても水で薄められています。」(Nr. 367, XIX; S. 100)

「今日は仏訳『老独身者』を送りますが、まだご存知なければ少し原文と比較して下さい。こんな翻訳を続けるのを承認する義務があるんですか。」(Nr. 391, XIX; S. 149)

『森の小道』 Der Waldsteig

1842年：5月以前 Heckenast (Nr. 39)；

1844年：9月22日 Heckenast (Nr. 50)；

1847年：12月16日 Heckenast (Nr. 121)；

作品集の編集の傍ら、ローゼンベルガー物語の材料を集め、仕事も順調にこなしている時期である。『習作集』第6巻の制作全体に願うのは、「ただ平穩のみ、何よりも明るさ」を目指していたシュティフターにすれば、『イーリス』の小説には「喜びと平静な心を十分に持って」(XVII, S. 270) 仕事を

したいと望んでいた。そのような気分で書かれたこの書簡には、『森の小道』についての構想と狙いを語っている。

「この物語『森の小道』全篇を脳裏に浮かべると、とても素晴らしい出来上がりと思います。第一部は活気があり、——な楽しい希望に満ちています。第二部は娘と出会う素晴らしい場面となり、——無知につけ込まれだまされた——ウィーンの極めて暗い雰囲気というより、むしろ明るい兆しに包まれています。全体を一気に読みますと、第二部は前と同じような深い心の状況に合わせなくてはいけないと思います。森の中で道に迷うところは最高の出来だったのではないのでしょうか。考えても見てください。この場合のように、愛する人と同様のしっかりとした自分独自の考え方を持って、この場合に対処する時はどうしますか。世間の人にはこのような無邪気とお行儀の良さが解ってもらえるのでしょうか。」(Nr. 121, XVII; S. 271)

物語の前半が希望に満ちたティプーリウスの回復の願いと、後半での村娘マリアとの出会いによって、人間らしい生活の実現を取り戻すという作品構造の中で、不気味な森の中における明るい救出、とくに平常の姿から異常な恐ろしさで迫り来る森の情景描写には、作家自身も満足している気持ちが伝えられている。作品の基本にある素朴な気持ちと謙虚な心が、読者一般に受け入れられるかが気になるところ、と告白しているわけである。

『二人の姉妹』 Zwei Schwestern

1844年：7月17日 Heckenast (Nr. 48)；12月25日 Heckenast (Nr. 52)；

1845年：4月1日 Heckenast (Nr. 55)；8月8日 Heckenast (Nr. 59)；

1847年：12月16日 Heckenast (Nr. 121)；

1849年：2月6日 Heckenast (Nr. 152)；

1850年：3月20日 Heckenast (Nr. 181)；

1844年7月に作品の執筆をほのめかしているが、初めてこの作品の具体的な名前が出たのは『イーリス』1846年版に用意された作品『名演奏者』Die Virtuosin (Nr. 52, S. 134)であったが、このタイトルは好ましくない、と

否定の気持ちをそれに書き加えている。さらに翌年にもタイトルへの不満が添え書きとして述べられ、『姉妹』Die Schwesternとして年鑑に発表した。それでも『書込みのある樅の木』Der beschriebene Tännlingの方がやはり優れているのじゃないか、と作品の出来栄を疑っている。完成したのは1845年で、(ロンドンへの手紙に)「今日は8月8日、四分の一印刷折りの原稿を誠実に書き、ペストの方へ送りました」(Nr. 59, S. 147)ので、「安心してください。『姉妹』は火曜日には終り、あなたの手許に届けます」と完成したことを報告。それでもなお手を加えたらしく、「どうか印刷が終わったら『姉妹』を読んでください——大体は新しくしました——」と断った上で、

「こんどは物語が大変滑らかな流れで、高貴にして、心のこもった作品にならなくてはいけないと思います。手許に残る原稿を通読すると、温かい心が感じ取れます。」(Nr. 121, S. 271)

と自身の作品に好意ある判断を伝えている。妻の病気に心を痛める作者の気持ちが、この作品に出る二人の姉妹の温かい思いやりの気持ちとなり、心に強く訴えるものがあつたと思われる。それがまたこの作品の基本となる造りであつたと言ってよいであろう。

それにしてもこれまでは、作家シュティフターと出版者ヘッケナストとの「二人の友情」として、美しい結びつきに見られているが、実際にはすれ違う二人の心に、深い溝が横たわることを思わせる「出版者への非難」がこの時期にはっきりと書かれている。

「どうして私のウィーンからの問い合わせに返事がないのですか。ご存知のように私はまたこのリンツに来ています。私は内務省の職に採用してもらおう心算でした。しかし話はどれもうまくいきません。あなたはどのように私の心配を鎮めることを先へ延すのですか。この問題に関して非難の言葉のいくつかを申し上げたい。あなたは忙しくて手一杯でしょうが、こちらへは一言も届いていません。あなたの性格は高貴にして控えめのことはよく存じていますが、面目を失うことなどない、と私は安心してるところです。しかしほかにどんな困っ

たことがあなたの身に起こったのでしょうか。せめて二行の言葉でよいから私に送ってください。あの『姉妹』はどこまで進んでいますか。連絡が遮断されてからも、もう一包みの原稿を送ったけれど、できれば第6巻の校正を送ってくださいな。正常に戻ればすぐ残りを送りますよ。」(Nr. 152, S. 318)

と強い不満がこの問いかけに込められている。一年後にも『習作集』への気がかりは止まなかった。

「あなたが『二人の姉妹』にどういう考えをお持ちなのか言ってください。この作品の描写は私が書いた作品の中できわめて汚れもなく、平穩に満ちていて、理性にも、芸術感覚にも一番ふさわしい作品だと思います。しかしそのような入念な描写、分別と道徳に適う物語の展開は、あのランダスマン Heinrich Landesmann⁽¹¹⁾ のような人には良く理解し得ないようです。あの人には無意味な作と思われるに違いありません。彼の『未来の結婚』Die Ehe der Zukunftを思い出せば、理性に反する、不道徳に吐き気をもよおします。」(Nr. 181, S. 40 f.)

とウィーン時代からの評論家の非難に、言葉を極めて痛烈な反論を展開しているのも、作品への自信と友人へのいらだちの溝が背景と思われる。

『書込みのある樅の木』 Der beschriebene Tännling

1845年：4月1日 Heckenast (Nr. 55) ; 6月 David Sauerländer (Nr. 57) ;

作品のタイトルを「ボヘミアの森にある一本の木の本当の名前」と説明している (Nr. 55, S. 145)。しかし家庭内の事情で締め切りに遅れてしまい、編集者サウアーレンダーに提出した原稿がいつまでも日の眼を見ないので、戻してもらうよう要求している。作品は実際には『ライン地方ポケット読本』Rheinisches Taschenbuch 1846に載ることになった。

『習作集』第1巻—第6巻 Studien : Band 1 — 6

1843年：12月8日 Heckenast (Nr. 47) ;

1844年：7月17日 Heckenast (Nr. 48) ; 9月22日 Heckenast (Nr. 50) ;

1847年：7月 Heckenast (Nr. 107)；8月21日、22日 Heckenast (Nr. 110, 111)；

1850年：4月20日 Heckenast (Nr. 184)；4月22日 Heckenast (Nr. 185)；

1857年：11月5日 Heckenast (Nr. 355)；12月16日 Heckenast (Nr. 362)；

文芸誌などに発表された小説を『習作集』として出版する企画は好評をもって迎えられた（第1、2巻）が、さらにこの勢いを広げようとして、旧稿に手を加えた第3、4巻用の原稿『痴人の館』、『書類綴じ』を送り届け、初稿の年を明記することを忘れぬようにと書き添えている（Nr. 47, S. 121）。1843年12月8日のことであった。この手紙にも稿料の数字を挙げた催促がしっかりと書き加えられている。「私は大いにそれを当てにしている」と念を押して、強い関心を見せている。この手紙にはまた『ウィーンとウィーンの人々』の原稿とその稿料についても、詳細にわたって見込みと報告を書き、『イーリス 1846』へのノヴェレも心配の必要はない（S. 120）、と作家としての上昇機運に執念を見せ、早くも「子供向け物語」の構想にも触れている（S. 121）ほどである。

このようなヘッケナストへの信頼を強く表明しているのが翌1844年の書簡で、ここには「あなた以外のほかの出版者からは本を出さない」（Nr. 48, XVII; S. 125）と確証を添え、結びつきの固さを強調して、稿料の支払いを迫る考えであるらしい。実際に前よりも詳しく稿料の計算を示し、『習作集』第4巻に650 fl. と明記し、さらに二巻分の原稿を送ると大風呂敷を広げている。『白いマント』、『三人の運命の鍛冶屋』Die drei Schmiede ihres Schicksalsの名も挙げられ、末広がり of 明るい展望に胸を膨らませていた時期であると読み取れる。9月には弟に第1、2巻を贈呈し、作品集全6巻に対する自信を報告している。（Nr. 50, XVII; S. 129）

この作品集が実際に世に出るまでにはやはりなお時間が必要であった。1847年7月の書簡では、『習作集』第3、4巻の再版の原稿や、第5、6巻の原稿に取り組んでいるが、やはりどうしても「変更なし」で印刷したいとの出版者の願いに対し、第4はそのままだとしても、第3は「ひとつ石をいじると多くが崩れてゆき、石の山をまた積み直さねばならない」（Nr. 107, S. 239）と「磨きをかける」恐れを告白し、第4も切り詰めたとしている。「直し」

は留まることなく続きそうである。その背景には有望な新進作家シュティフターへの批評が、好意とともに批判も増していったからと思われる。シュッキング Levin Schücking（1814—1883）からの「悲しい手に捕らえられた私」への批評に対しては、「あの人は審美眼に欠け、判断力も時と場合で変わり、キャベツ頭を較べているだけ」（S. 239）と反論している。批判の矛先は主に第3の『書類綴じ』、『アプディアス』に向けられ、第4には好意的だったのだが⁽¹²⁾。このほかにもグリルパルツァーの『哀れな辻音楽師』 Franz Grillparzer : Der arme Spielmann には賞讃の言葉を送っているが、編集者マイラートには、原稿遅れへの非難に対し苦言を呈している。（S. 241）

翌8月の手紙には物語の配列を語っているが、それより注目すべきは、作品に大幅に手を加え、「拡張する」と伝えている点である。つまり物語の拡大は必要なのかということであり、「最後を大幅に拡大した」『老独身者』は茫洋とした長い話を引きずることになった。『森の小道』は妻の病気で不出来であったのを拡張し、構造を大きく変えて、話のバランスを取り直し、「さらに拡大」したし、『姉妹』も「結末をやはり拡張し、代わりに中間部を短縮した」と、直しはつねに引き延ばしをする「増加」となり、作品の密度や、物語の構成に問題を投げかけた⁽¹³⁾。

暗いウィーンの生活に飽き、1848年5月、郷里に近いリンツに移ったシュティフターは、時代の傾向に厳しい眼を向けるようになった。1850年4月22日の書簡では、原稿料の計算にもこれから出来上がる「青少年向け作品」を取り上げ、これが1000 fl.で、『習作集』全六巻は3000 fl.と見て、いま43歳だから30年は著作権があり、帝国議会の文芸資産保護策が実現すれば60年は続くと読んで、自分や妻の稿料、印税による後々の生活に思いを馳せている。この時代の作家にはつねに収入の心配が消えなかったであろう。特に時代の流れから外れた作家には大問題なのである。自分への批評が冷たくなり、自身の立場が世の流れに反するとき、言葉も次第に激しくなっていく。

「ゲーテ、シラーのようなかなりの大物でも、いろいろと攻撃を受けたくらいだから、私にも降りかかってきます。革命詩、傾向小説、党派文芸、派閥思考

が消滅するか、次の世代には珍品としても理解されなくなるとして、この『習作集』は欠陥があろうとも、私はこの作品の持つ単純さ、自然な点で、長く持続することと思います。」(Nr. 185, XVIII; S. 48)

それを保障するものとしてプロイセンの将軍・政治家ロドヴィツ Joseph Maria von Rodowitz のほめ言葉を援用している。「現在の文芸作品で残るわずかな作品のなかに『習作集』は入る」(S. 49)を激励の言葉としてしっかりと引用している。これに勢いを得たかのように、シュティフターはランデスマンおよびその一派の攻撃に次の反論を加えている。

「一派は1、2を誉めて3、4、5、6、を批判していますが、私にすれば最初の1、2は流行の文学であり、どの国の古典文学にも見当たらない、どんな時代にもこんな馬鹿げたものが派手に載っているのは見たこともない。どれも新しい愚作を作るだけです。」(S. 49)

と厳しい言葉を返している。

そのような状況だからこそ、時代の動向を憂慮して、青少年向け作品をしっかりと仕上げからあなたに渡すとしている。

「さらに磨きを加えればその作品に一般の人は悲劇を認めるでしょうし、これだけがポエジーなのだと解ってくれることでしょう。」(S. 49)

と、時代に警鐘を鳴らそうという『石さまさま』作品集に自信を示している。

B. 『短篇物語』 *Erzählungen*

『三人の運命の鍛冶屋』 *Die drei Schmiede ihres Schicksals*

1844年：7月17日 Heckenast (Nr. 48)；

1857年：12月16日 Heckenast (Nr. 362)；

1844年に執筆し、『ウィーン文芸誌』に発表したこの作品を、『習作集』第4巻に余裕があれば、『白いマント』とともに入れていただきたいとの要

望。（Nr. 48）

1857年の手紙は昔の掲載誌を探し求めている。

『森を行く人』 Der Waldgänger

1846年：1月または2月 Heckenast (Nr. 62)；4月26日 Heckenast (Nr. 64)；

6月3日 Heckenast (Nr. 69)；12月28日 Heckenast (Nr. 85)；

1847年：2月13日 Heckenast (Nr. 89)；

1857年：12月16日 Heckenast (Nr. 362)；

比較的保守的な上流の市民階級に受け入れられたシュティフターの小説だが、雑誌に発表された多くの短篇小説が『習作集』に集められ、第1、2巻も世に出て、順調に好評をもって迎えられた時期であった。さらに先への希望を抱いて、文芸年鑑『イーリス 1847』——燦然と「ドイツ年鑑」と書き加えられるようになった——のために書いたのがこの『森を行く人』であった。

「この小説はきっと3月15日にはお手許に届けるようにします。編集のマイラートさんに安心するよう伝えて結構です。昨日この作品をシュヴァルツェンベルク Schwarzenberg 侯爵夫人とベッティ・パオリ Betty Paoli (1815—1894 詩人、批評家)の前で朗読してみました。話の素材はとても気に入ってくれました。この話に私は強い愛着をもって書いているところです。『イーリス』の恥とならないように、弱いながらも力の及ぶ限り努力します。」(Nr. 62, XVII; S. 154 f.)

物語の内容もシュティフターの若い日々を思わせる作品で、挿絵も画家のガイガーに書いてもらい、しかも『イーリス』も従来のポケット判から大型に改められるので、期待は大きかった。さらに4月26日の手紙では、流感で寝込んでしまい、原稿の遅れたことを気にしながら、執筆状況の見通しを出版者に報告している。

「第一章の終りは書けていますが、あなたに気に入りますようお願いのみです。

この第一章は森を行く人の気品と完全な孤独を描いています。旧判『イーリス』

の55頁分で、この後にも同じ分量が続くことになりますが、今日から12日以内に全部を書き上げてポストに託します。どうか検閲なしで印刷に廻してください。きっと当局から「印刷可」のお墨付きが付くはずですよ。どこにも検閲に引っかかる問題は髪の毛一筋もありませんから。六日のうちに3枚、次の六日にまた3枚を送ります。確かなことです。その前に外へは出ませんよ。」(Nr. 64, XVII; S. 159)

その先にはやはり『習作集』の続刊の原稿や、自分の描く絵が巻頭を飾るかなどに話が及ぶが、ふたたび『森を行く人』に立ち戻って気がかりな点を問いかけている。

「あの森を行く人をゲオルクと呼んでいましたか教えてください。二つの名前をコンセプトで考えていまして、どちらを選んだか解らなくなりましたので。ゲオルクなら返事なしに、違うならやはり返事なしで結構です。手紙は着かないでしょうし、最初の3枚からその名を消して、ゲオルクと書き込んでください。」(Nr. 65, XVII; S. 161)

主人公の名を何としたかの迷いについて綿密に書き添え、手紙の遅れも計算して先のことを考えるところなど、この作家ならではの廻りくどい言い廻しの好例を見せている。こうして約束の結末を送る段になると、物語をどうまとめるかに悩み、締切りへの焦りも洩らしている。

「あなたのお手紙では『森を行く人』の結末は届いていないとのことですね。これはきっと届きますよ。この前の金曜にポストに託したのですから。それによってあなたのお仕事を遅らせてしまい、どれほど私が苦しい思いをしたか想像できないでしょうが。もうそんなことにはこだわっている暇はありません。48年版のために10月から取り掛かる心算です。」(Nr. 69, XVII; S. 167)

この手紙に見られるように、本人としてはかなり努力して作品を仕上げ、これまでに寄せられた人気、好評を持続し、『イーリス』の恥になるまいと

願って発表したわけだが、次々と厳しい批評が寄せられるようになった。問題は『フモリスト』Der Humorist, hrsg. v. Saphir 誌の編集者ザーフィアが、『イーリス』を編集したこともあったのに、批判する側に廻ったことである。新鮮で素朴な自然への思い入れと、モラルを重く見る考え方によって、一般市民に受けていたシュティフターに、そのいずれの面にも、批判の言葉を向けている作家ザイドリッツ Julius Seidlitz (1814 - 1857) の言葉は厳しいものであった⁽¹⁴⁾。

ここに指摘される問題点は、物語における自然の描写の単調さと長々しさ、男女間の不道德な生き方、単なる郷里の地誌との批判であった。これ以後は作品発表の機会も恵まれず、「『習作集』の作家」としての人気にかげりが見られるようになった。時代の関心も政治的な変革を望む声が強まって行く状況では、表舞台から消えてゆく危機が迫ってきた。1846年12月末の手紙にはそのような影が大きく広がっている。

「『フモリスト』誌は私の弟からの知らせでは私を批判しているとのこと。私にはどうにもならないし、その内容も読んでいないので何も解りませんね。おそらく『森を行く人』のことと思われます。いまようやく第一章を読んできましたが、この人の心の奥の、まじめで男らしい孤独感が漂い、この人物がほかの人よりも高尚で、ポケット判読物のお涙ものとか、それと同様なものに色気を見せることなく、内向きに閉じこもっているのが解りました。結末ではどうしてもやはり元に戻って最初の場面を説明しなくてはなりません。お客さんは気に入ってくださっているようで、きょう本屋のプランデルとヘルツルに聞いたところでは、本はとてもよく売れたそうです。」(Nr. 85, XVII; S. 196)

さらに翌1847年2月19日の弟アントン宛書簡では、厳しい言葉を浴びせられた作品の欠陥を認めつつも、売れ行きのよさを確認しているが、苦しい弁明にも聞こえる。

「『フモリスト』誌の批評や、「アルゲマイネ新聞」に載ったラウベ Heinrich Laube (1806 - 1884) の馬鹿げた批判への回答として、お客さんは『イーリス』

を熱心に買い求めてくれます。書店ブランデルの言うところでは、この文芸年鑑でヘッケナストは大儲けをした、とのこと。私の会った人みんなから好意のこもった言葉ももらっています。ですから、この物語に誤り無しとはしません、私もその失敗した点はよく解っていますから、取り上げた批評家の言うのとは違うと思いますよ。」(Nr. 89, XVII; S. 206)

ラウベが1847年1月5日「アルゲマイネ新聞」で指摘したのは、作品のコンポジションのまずさ、風景描写の長々しさであり、物語に描かれる思想や人間像が話の片隅に押しやられて、これまでの人気作家の評判を落とすような致命的な欠陥との批判は手厳しい。ほかにも長々とした物語の構造には話の緊迫感も乏しく、「自然描写は素晴らしくとも、筋の展開に努力し、読者の関心を減らさないように」と核心を衝く鋭い批評が続いた⁽¹⁵⁾。

『プロコープス』 Prokopus

1846年：11月22日 Heckenast (Nr. 81)；12月28日 Heckenast (Nr. 85)；

1847年：2月16日 Heckenast (Nr. 90)；3月1日 Heckenast (Nr. 91)；4月18日 Heckenast (Nr. 93)；5月21日 Heckenast (Nr. 97)；8月22日 Heckenast (Nr. 113)；11月16日 Heckenast (Nr. 118)；

1857年：12月16日 Heckenast (Nr. 362)；

『イーリス1848』の物語を書いている、と初めて作品執筆を伝える1846年11月22日の手紙には、「短くする」考えを明らかにしている。しかしこの小説が完成して実際に編集に届いたのはかなり遅れ、3月末、4月初め、5月末と原稿の完結が延びて行く跡を辿ることになる(Nr. 81, 85, 90, 91, 93, 97)。

こうしてやっと作品が完成して、翌47年に文芸年鑑に載ると、待っていたのは冷たい批評であった。『フモリスト』誌に載ったエングレンダー Sigmund Engländer の言葉は作品の構成、テーマ、叙述のどの面にも厳しく、この作家への不評を決定的にしたといえる。

およそ資質からしてフォルムというものを持たないシュティフターには、「全世界が森と草地、草の茎と露の滴なのだ」と断じ、自然の姿を次々に羅列して描写するのを強く非難したヘッベル Fr. Hebbel 派の論者は、激しい言

葉を浴びせかけている。「この作品『プロコープス』は形式にまとまりもなく、どうにも妥当と思えない楽しみ方で、結論も得られず、叙述表現というものをどこにも見出だせない作品である。どの面からも感動によって心を捉え得るものでなく、曖昧で不明瞭な姿を我々の前に見せている。もはやシュティフターは持続性を持たない、もう終わってしまった存在だという確証を我々に与えてくれたのである。」⁽¹⁶⁾

このエンゲレンダーは2年前に『習作集』が出たときには、「雑誌稿」の作より話の流れが豊かになり、『深い森』のような素晴らしい自然美も磨かれて、「もはやここには習作というような試作に留まらず、結論の作、完成作がある。作り物でなく、学習したものでなく、ほかから影響を受けたものでなく、うそ偽りのものでないのだ。シュティフターはまさに立派な作家なのである」⁽¹⁷⁾と賞讃したのを思い出せば、この流行作家への追風が逆風に変わりゆく状況を把握できるのではないだろうか。

C. 『石さまざま』 *Bunte Steine*

1843年：12月8日 Heckenast (Nr. 47)；

1849年：3月6日 Heckenast (Nr. 153)；

1850年：3月20日 Heckenast (Nr. 181)；6月6日 Heckenast (Nr. 189)；

1851年：7月16日 Heckenast (Nr. 206)；11月16日 Heckenast (Nr. 211)；
12月24日 Heckenast (Nr. 215)；

1852年：7月20日 Heckenast (Nr. 229)；9月18日 Heckenast (Nr. 236 a)；
9月24日 Louise Eichendorff (Nr. 238)；10月6日 Heckenast (Nr. 241)；11月30日 Heckenast (Nr. 247)；

1853年：10月14日 Heckenast (Nr. 269)；

1854年：2月3日 Friedrich Culemann (Nr. 279)；

〔作品集の構想から出版の実現へのあゆみ〕

作品集『石さまざま』の萌芽となる最初の発端から、二巻本の出版までは社会状況が大きく変化している。1843年12月の着想は「子供の物語」Kindererzählungenも構想に加えられているが、子供への作品か、子供が主題

かを明示していない。1849年3月には政情不安の世に向けて「子供のための二、三巻」という具体的な構想を抱いた。三月革命による国中の都市における動揺と共に、シュティフターの祖国オーストリアとヘッケナストの祖国ハンガリーとの確執は深まった。分離か統一か、ジャーナリストや教授連を巻き込む争いとなった。その夏の惨状をシュティフターは嘆く。

「この夏（48年）私はひどいこと、無礼なこと、非人間の行為、おろかな所業、しかも最高の行為とうそぶく厚かましい振舞いに、口に言い表せないほど苦しみました。私の心の中で大きく、善く、美しく、また理性に適う気持ちが怒りに震え、道徳、神聖、芸術、神々しい世界が一切無に終わるあんな生活と較べれば、死さえも甘美なものに思えるくらいです。力を持つのは教育だけなのです。子供は革命なんかしませんし、母親も同じなのです。」（Nr. 153, XVII; S. 322 ff.）

この告白には『石さまさま』作品集、『人文教育読本』Lesebuch zur Förderung humaner Bildung in Realschulen、さらに『晩夏』への一章となる『老農園主』Der alte Meisterの着想が文中に飛び交い、現状への耐え難い不満と執筆活動の心の揺れ動きを伝えている。作家シュティフターの生涯の転機となる書簡でもある。この読本の構想はさらに発展し、1850年3月には「法と国家の全体に関する基本方針を一般の人に理解されるようにまとめた国民へのハンドブック」もプランとして持ったが、実現はしなかった。それと並んで、またそれを形あるものにしようとして、「青少年のための物語二巻」が7月にはあなたに渡せると明言するにいたった。

視学官の仕事を通してシュティフターはますます教育の必要を痛感し、この『作品集』の基本精神となる考え方を「理性的で穏やかな改革と、獲得できる善行への努力」におき、確実に幸福な状態を手に行けると書簡で力説している（Nr. 206, 215）。公務や家庭での不運の中で、時代の混乱状況に背を押されたように、『作品集』の出版は「稿料の値段」（Nr. 189）も「磨き上げ」（Nr. 211, 215）も「通読」（Nr. 229）も、実現を停滞させることはなかった。52年9月にはいよいよタイトルを決める時期に達した。初めは50年1月にFlursteine「野原の石」と提案していたが、Jugendschriften「青少年読物」か

ら Jugendgeschenke 「青少年への贈物」と改めた（Nr. 236 a）。出版社のヴィーガンツ Wigand の提案した Aus der Kinderwelt 「子供の世界より」はヨハンナ・ショーペンハウアーに近すぎるとして断った（Nr. 244）。副題には「祝祭の贈物」Ein Festgeschenk von Adalbert Stifter が添えられた（Nr. 241）。しかし出来上がった本を見て、L. リヒター（Ludwig Richter, 1803—1884）の描く少年像の挿絵には大いに不満（Nr. 247）があり、また A. ツアイジング Adolf Zeising の批判への反論では、「よく売れている事実が、論者の主観的判断を否定している」と苦言を呈している（Nr. 269, XVIII; S. 185）。

文学的テーゼとなる『作品集』の『序文』Vorrede で論じた Groß und Klein 「大と小」への考察に理解を確認したのは、ハノーファーの印刷出版業者クルーマン Friedrich Bernhard Culemann 宛書簡である（Nr. 279, XVIII; S. 206）。

『みかげ石』Granit；初稿：『瀝青を焼く人々』Die Pechbrenner

1848年：3月2日 Carl Herloßsohn (Nr. 126)；

1852年：2月12日 Heckenast (Nr. 220)；2月29日 Heckenast (Nr. 221)；

7月20日 Heckenast (Nr. 229)；11月30日 Heckenast (Nr. 247)；

物語の構想を具体化して執筆を始めたのは1847年と推測される。この内容をライプツィヒの編集者に詳しく語り、『勿忘草』Vergißmeinnicht 誌1849年版への採択を希望するのが1848年3月の書簡である。

「物語の素材は南部ボヘミアで起きた先年のペスト大流行期に実際にあった事件です。私の幼少時代に祖父から繰り返し聞いた話で、祖父が日ごろ使っていた表現や言い廻しをそのまま活かして、祖父の言葉で語ろうと思います。」(Nr. 126, XVII; S. 278)

さらに話を進め、交渉成立なら稿料支払いはいくらでよいかなど、細かい数字を挙げる。

「物語は『イーリス』版で三折り（頁1540字で16枚分）、ヘッケナストからは四折りで200 fl. 受け取っています。ですから私の三折り分は150 fl. の値段で

お渡しします。原稿到着後ご不満なら2週間以内に返却を、よろしければ送金してください。」(ibid)

この初稿は書き改めて『作品集』に収めることになると、大きな変化を体験することになった。作者自身が時代の革命の動乱に心が乱れ、共鳴から批判への想いを深めていった。暴力から穏やかさへのコンセプトの移行が作品の構造に大きな影響を及ぼし、話のまとまりを切り詰めたのである。つまり初稿から減量した唯一の例となつて、『作品集』の趣旨に合う巻頭の物語に変身したのである。この時の改稿の仕方を1852年の二通の書簡は伝えている。

「一折り分送ります。修整して清書したものですが、まだ直しが残っています。物語は「一気に」書かないと駄目です。どうしても眼の前に全体を見渡せない、艶も円みも出せませんから。」(Nr. 220, XVIII; S. 108)

自分流の書き方に従い、これ以前の分も全部送ってもらいたいとの要求は、シュティフター流創作の手順と言える。とにかく原稿の全体を見渡して隔々にまで眼を通す「durchschauen」という考えは、多くの書簡にも「通読」Durchlesung; Durchlesenの機会を求めて繰り返され、引渡し前の最終の通読に執念を燃やしているのが解る。「修整して完成した作品の原稿を編集者に届けたい」(Nr. 221)、というこの作家ならではの綿密さをのぞかせているわけである。それほどまでに入念に第一の物語に力を入れたのに、L. リヒターの挿絵はこの『作品集』の巻頭に相応しくない出来で、ありきたりの月並みな子供の姿に、強い不満をおちまけている(Nr. 247)。

『石灰石』 Kalkstein ; 初稿 : 『貧しい慈善者』 Der arme Wohltäter

1852年 : 7月20日 Heckenast (Nr. 229) ; 7月27日 Heckenast (Nr. 231) ;

第1巻の巻頭物語に最後の手を入れ、他の作品との調整を終えたシュティフターは、第二物語の完成を待つ編集者に、「第二の物語は通読と欄外書き込みで長く掛かる」と、遅れを伝えている。紙数も増したので、最長の作品

『白雲母』Katzensilberに匹敵する長さになった。原稿を届けたのが7月27日
日で、さっそく第三の物語に取り掛かった。この第二、第三の物語は作品集
の趣旨に合わせて大幅に改稿している。

『電気石』Turmalin；初稿：『貴族屋敷の門番』Der Pförtner im Herrenhause
1848年：7月2日 Paul Alois Klar (Nr. 137)；
1852年：7月20日 Heckenast (Nr. 229)；7月27日 Heckenast (Nr. 231)；
初稿は1848年7月、プラークの年鑑『リブッサ』Libussaへの寄稿を編集
者クラールに提案、稿料は50 fl。三月革命の混乱による「プラーク事件」
により、掲載されたのは1852年版であった。この初稿への加筆を7月27日
の書簡が伝えている。

「ようやく『石灰石』をお届けします。〔原稿を〕切り詰めたので、どうして
も最後の2ページは新しく書く必要がありました。通読で他の仕事を休むわけ
にいかないの、長く掛かりました。これからは第三の物語にしっかりと手
を入れます。これは『電気石』という名にします。私の心配は、新たな改作により、
一年も掛かることのないようにということです。作品は単純、明解で、心に迫
る傑作になると想像しています。」(Nr. 231, XVIII; S. 120)

しかし作品集には初稿の2.6倍となった物語『電気石』が収められている。

『水晶』Bergkristall；初稿：『聖夜』Der heilige Abend
1846年：1月または2月 Heckenast (Nr. 62)；3月17日 Heckenast (Nr. 63)；
8月5日 Joseph Axmann (Nr. 74)；11月16日 Heckenast (Nr. 78)；
1847年：1月6日 Heckenast (Nr. 86)；2月16日 Heckenast (Nr. 90)；3月1
日 Heckenast (Nr. 91)；8月3日 Heckenast (Nr. 108)；8月25日
Joseph Axmann (Nr. 113)；
1848年：9月8日 Heckenast (Nr. 143)；
1849年：10月13日 Heckenast (Nr. 169)；
1851年：11月28日 Heckenast (Nr. 212)；

1852年：8月30日 Heckenast (Nr. 234)；9月13日 Heckenast (Nr. 235)；
11月30日 Heckenast (Nr. 247)；

1858年：5月12日 Heckenast (Nr. 374)；

代表作の一篇に数えられるこの『水晶』は、初め『聖夜』として政治・文芸誌『現代』Die Gegenwartに1845年12月に発表され、好評をもって迎えられた。このため残されている書簡にも、自信と自慢の気配が色濃く見える。

「物語はこちらでもとても多くの拍手をもらい、雑誌はサークル仲間の間に広まり、」(1846年2月Nr. 62 XVII; S. 154)「この『聖夜』をクリスマスプレゼントとして待っている人があちらこちらいると聞きまして、とても弱っているところです。」(1847年1月6日Nr. 86, XVII; S. 199)

この好評に「いかがですか？ あれはやはり独特な物語ですが」(1847年8月3日Nr. 108 XVII; S. 244)と自作に自信を示すが、やはり「改良したい」内心のうずきは抑えがたく、51年11月には、

「私の望むような純粋で素朴な表現が、温かさ、香しい雰囲気、誠実さをともなって実現できれば、すべてはうまくゆくことでしょうが、しかし私はいつも理想の作りには手が届かないのです。」(Nr. 212, XVIII; S. 95)⁽¹⁸⁾

と告白している。この手入れの気持ちは早くも1846年3月(Nr. 63, XVII; S. 158)に洩らし、作品集をまとめる1852年8月にも修整の意図を明示している。一生懸命に仕事に励み多忙な中で、と弁明した上でこう語っている。

「修整の手を加え、磨きのメスを入れた『水晶』に、この先もう一度、言葉を純化し、文章を整える機会をえられるなら、あの作品は天からの力強い援けがあったとはいえ、ひときわぬダイヤモンドになると私は思い込んでいるところです。」(Nr. 234, XVIII; S. 123)

物語への愛着と磨き上げる情熱がこの作品に結晶して、シュティフターは

自信のほどを口にしている。

「作品集で『水晶』と『白雲母』が一番の出来ではないかと思います。」(Nr. 235, XVIII; S. 124)

シュティフターの気懸りは、作品への磨き上げの報せ (Nr. 90, 91) のほかに、挿絵に対するガイガーとアックスマン Joseph Axmann への注文と L. リヒターへの不満がこの時期から強まっている (Nr. 74, 78, 143, 247, 347)。

『白雲母』 Katzensilber

1852年：7月20日 Heckenast (Nr. 229)；9月13日 Heckenast (Nr. 235)；
10月29日 Heckenast (Nr. 245)；

1853年：1月5日 Joseph Türck (Nr. 249)；1月12日 Heckenast (Nr. 250)；
3月31日 Louise Eichendorff (Nr. 255)；

シュティフターにすれば、この作品は自信の持てる傑作となるはずであった。1852年7月、初めてこの作品に触れたときも、「第二の物語は最長になり、だから時間も掛かる」(Nr. 229) という挨拶であった。実際に頁数も最長で、力が入ったことと思われる。しかしその割りに良い評判は聞かれない。雷雨と雹と火炎の恐ろしさが勝り、登場するジプシーの「茶褐色の娘」das braune Mädchenを描く人間描写が弱いためらしい⁽¹⁹⁾。このジプシーの少女を絵に画いてもらいたいと依頼するチュルク宛書簡 (Nr. 249, 250) のほかに、女友達のルイーゼ・アイヒェンドルフ宛書簡で彼女の絶讃に答えて自慢している。

「私は『白雲母』がもっとも良く書けた作品で、一番しなやかだと思っています。子供たちを探し求め、結局はまた立ち去ることになった、あの茶褐色の娘の何とも口に言い表せない感情は、哀愁の極みと思っています。」(Nr. 255, XVIII; S. 159)

『石乳』 Bergmilch；初稿：『白いマントの印象』 Wirkungen eines weißen

Mantels

1842年11月27日 Heckenast (Nr. 43) ;

1844年7月17日 Heckenast (Nr. 48) ;

1852年 : 7月27日 Joseph Axmann (Nr. 230) ;

『白いマントの印象』が最初に書簡に出たのは、なお『習作集』をまとめている時期であった。1842年11月の「追記」には、作品の完成と、できればご検討をと願っている。さらに1844年にも『習作集』の第4巻に空きがあれば『白いマント』と『鍛冶屋』を入れていただきたいと願っている (Nr. 48)。1852年には作品に手を入れるため雑誌稿を求めている (Nr. 230)。

IV 現代の視点

〔1〕 磨き上げる作家

feilen はもともと「やすりで磨いて仕上げをする」作業で、芸術作品の場合には「推敲する」、「彫琢する」が適訳であろう。しかし作家シュティフターが feilen する実像では、原義とおりに「原文を削り、磨き、書き直し、滑らかに改める」手入れをどの作品にも行い、機会がある限り直しの筆を入れた。その抑えがたい情熱は年齢と共に高まる一方であった。『書類綴じ』が四稿を重ねてなお未完成に終わったほどである。自筆原稿には微細な文字による書込みが本文の行間や欄外に溢れんばかりで⁽²⁰⁾、徹底した激しさを語っている。生来の資質によると言うべきであろうか。文壇にデビューして間もない『野の花』を書き終えたときには、早くもこの言葉 feilen を口にし、次の仕事への磨き上げによりをかけている。(Nr. 25) 雑誌稿と書籍稿の対照比較の研究が示すとおり、多い少ないはあっても、「やすりをかけ、削り取り、加える」作業が丹念に行われている。多くは加筆であり、それによって、「情念の高揚」を描く物語から「観察する抑制の世界」へと変化を見せている。新全集 HKG の編集に当たるヘッチェ W. Hettche とヨーン J. John も、この「最後の磨き上げ」をどのように研究資料として提供するかの論考を発表し、feilen する作家シュティフターの心情に迫ろうとしている⁽²¹⁾。

Lieber Anton!

Ich habe Deine Aufregung mit den verschiedenen Anlässen,
 in Verbindung, so wie auch die verschiedenen. Es war auf, daß die
 nun geschickten bei mir von dem Zeitpunkt anfangend nicht mit
 demselben Schritt kamen. Es ist eine. Ich hatte die Güte der
 nicht nur heute der Natur der 1862 in die neuen Güte der
 jeder Mensch abzugeben zu können. Die für die Lösung der selben macht
 es für die zu fünf Jahren anzuwenden

Allein auf Gott verlassen abzugeben, so findet die
 in die verschiedenen furchtbaren Lösung in einem Mitleid, die von
 gleichwohl in der Lage zu sein, die verschiedenen nach dem besten Willen
 abzugeben, in demselben in einem bestimmten Maß der (bestimmten)
 zum besten zu sein, in demselben in demselben in demselben
 demselben zu sein. Ich bitte dich, mir Gott diejenige
 meine Tute anzuwenden falls, meine ist, nach einem furcht
 ist. demselben in die Lage zu sein, in demselben die Lösung in
 die so nicht möglich, so bei demselben von demselben aber auch
 eine Lösung derjenigen der Lösung. Ich bitte dich, mir
 demselben mit einem Tute so wie demselben, die auf demselben

弟のアントン・シュティフター宛書簡 (1861年11月16日)

[2] 時代の人気作家

シュティフターは1840年に『コンドル号』の原稿を男爵夫人から雑誌編
 集者に紹介され、若い女性がバルーンに乗って大空を駆けるといった、当時
 としては破天荒な話題を取り上げ、一躍人気作家に駆け上がった。そうなる
 と原稿の注文が次々この人気作家に寄せられたのは当然であった。この
 1840年から三月革命の48年にいたるまで、十年近い期間に発表された作品

を一覧にしてみると（註9参照）、売り出し中の有望な新進作家が、『ウィーン文芸誌』、文芸年鑑『イーリス』といった伝統的な家庭読み物の世界でどれほど愛好されたかが推しはかれよう。当初の成功作『深い森』で人気を高め、画家の眼によるボヘミア高地の森や原生林を描く歴史物語で好評を博し、作品への論評も新人作家に好意的で、品位ある人間描写によって、上流階級に好んで読まれ、文学サロンの話題にもよく取り上げられた。文芸誌や文芸年鑑への作品発表の多さもそれを示している⁽²²⁾。

この時期のシュティフターは前にも述べたように、もっとも創作意欲に満ち満ちていて、まさに売り出し中の作家となっていた。新進作家として作品の名も雑誌によく見られるようになった。『子供の物語』は後に『白いマントの印象』として1843年に発表され、さらに『石さまごま』の『石乳』へと書き改められた（Nr. 43）。このほかにも『姉妹』、『森の小道』などの初稿も誕生した。1846年3月17日の書簡には『森を行く人』、『聖夜』の執筆にも触れている。後者は『水晶』となり、代表作の初稿となった。まさにシュティフターは世の注目を浴びる「人気作家」として、執筆依頼もつぎつぎと届き、作品のあらたな構想も止まることなく湧き出てくる売れっ子ぶりを見せていた。

その時代の受け取るシュティフターのイメージを具体的な姿で見せるのは、ダッフィンガーの描く肖像画であろう。1846年2月の手紙（Nr. 62）には、「明日この有名な画家の前に座るけれど、この世に二つとない作品となるのじゃないだろうか。どんな人の手許にあるのより上手な作となるよう願っている」（XVII; S. 155）と、自分の肖像画の出来栄を気にかけている。出来上がったのは、まさに愛すべき人気作家が創り出したポートレートに他ならなかった。しかし時代は大きく変わり、当時のウィーンの文壇に盛名を馳せるにはいたらなかった。1848年3月からの国家を揺るがす政治的混乱に巻き込まれて、讃辞に代わる酷評も数を増し⁽²³⁾、人気作家シュティフターの名はうたかたのように忘却へと葬られ、消えていったのである。

〔3〕 稿料の前借り

今日でも大多数の作家志望者が生活のために金銭上の苦しみを経験するこ

とは変わらない事実である。30歳代のシュティフターもウィーンでの生活には金に困っていた。上流階級の邸宅を訪れ、家庭教師としてのわずかな収入で、細々と大都会の片隅に暮らし、好きな絵を描いて夢を馳せていた⁽²⁴⁾。編集者マイラートとの出会いによって、作家への夢は大きく実現へと動き出した。しかし原稿料収入による生活のため、日々の支払いに追われ、原稿枚数による細かい金額の算定は、作品の文章のきめ細やかさと同様に、いやそれ以上に綿密な数字を挙げることで、その切実さを語っている。作品の構想や原稿枚数を挙げ、送付する予定日まで明示した上で、最後には決まったように、稿料の前借り、しかも具体的な月割の金額を算定して、繰り返し送金を願っている。多くの場合にヘッケナストがシュティフターの希望に応じていることが推測される。次回の手紙にはまた次の別な金銭要求が、別な理由をつけて最後を締めくくっているのをみると、一件落着し、次の問題提起に進んだと解る。かような現実的な稿料前払いの要求と、作品執筆予定との関連を目の当たりすると、改めていずれが主題なのかと考えさせられる。

しかし自作への抱負を飽きることなく語り続け、原稿の修正、校閲の遅れへの弁明を十年、二十年と重ねる姿からは、百年先を見据える『晩夏』への情熱を燃やすのと同様に、前借りへの単なる口実を超えた文学への熱い執念が行間から感じ取れる。

〔4〕 拡張と退屈の宿命

書いた文章に手を加え、削り、改め、思いに従って書き加え、そのあげく、出来上がった作品は読む人の心から次第に離れてゆく。この宿命ともいえる「磨き上げる」本能に従い、最初期の『野の花』への不評を乗り越えようと、シュティフターは手直しと切り詰めにより、初稿『密猟者』を『深い森』へと全面改稿した。人気作家となって雑誌に書き始めると、この個性は抑え難くなり、『書類綴じ』の場合には、拡張する筆を加えるようになった。校正を読むと延々と止まることなく続く話に、自身でも「恐ろしく退屈した」(Nr. 90)と告白している。『習作集』、『石さまごま』では大部分の作品に手を加え、話を緩やかなテンポに伸ばしてゆく。作品は多い少ないはあれ、いずれも書き加えている。HKGの資料で調べてみると、多いのは『書類綴じ』

2.4 倍、『森の小道』2.6 倍、これに近いのが『アプディアス』1.96 倍、『二人の姉妹』1.7 倍が続く。『森の小道』は妻の病気により半出来の構造で発表したが、改稿により前半と後半のバランスが取れ、ヒポコンドリーを病む男が森に迷い込む恐ろしさと、素朴な村娘による救出の明るい解決の対照により、一般読者から好評を得た。「自分でも話に感動してホロリとした」(Nr. 25) 『深い森』だけは手を入れずに最終稿とした。『石さまざま』では『電気石』の2.3 倍が異常な増え方だが、全短篇物語で唯一の例外となる『みかげ石』の0.8 倍は、ラッヒンガーの解説するように、作品の基本性格を改め、作品集の趣旨に沿って、[暴力からおだやかさ] へとコンセプトを変えたのが際立っている⁽²⁵⁾。

「拡張」erweitern が「磨き上げ」feilen の結果とはいえ、話はどうしてもより詳しく、より廻りくどくなり、物語の流れが小事によどみ、果ては茫洋として行方も定かにならなくなる。『森を行く人』もその一例であろう。しかし物語の緊張度と盛り上がり、描写の的確さと魅力によって、『深い森』、『森の小道』、『水晶』は変わらぬ好評を得ている。大作『晩夏』も個別の枠物語、個々の情景描写、作品の底流となる基本思想とその的確な叙述に、読む者の心を捉えるものが多いが、やはりこの作家の宿命の天性からは脱していないと言えよう。トーマス・マンも第二次世界大戦中の亡命先アメリカで『晩夏』を読み続け、「巨大にして魅惑的な」と思いながらも、「奇妙で共感と呼ぶ」この単調な作品の「退屈な長々しさ」に、読み終わって「雄大だが笑ってしまう」とその純粋さを日記に書き留めている⁽²⁶⁾。

(1) シュティフターの書簡集と評伝

Johannes Aprent : Adalbert Stifter, Briefe. 3 Bde. Pest : Heckenast 1869.

作家の死の直後に刊行され、親友 Aprent の好意により美化されて信用されない。

Alois Raimund Hein : Adalbert Stifter, sein Leben und seine Werke. 2 Bde. Prag 1904

2. Aufl. Wien-Zürich Walter Krieg Verlag 1952.

畏敬の念から絶讃する伝記で、出版の当時では多くの書簡を収め、貴重な資料とされた。

Josef Bindtner : Adalbert Stifter, sein Leben und sein Werk. Ed. Strauche Verlag Wien-Prag-

Leipzig 1928.

多くの書簡 (G. Wilhelm の PRA 版による) を資料とした評伝。戦前では貴重な資料とされた。

Briefwechsel von und an Stifter: PRA. SW 17-24 (23-24 Briefe an Stifter) 1916-1939.

八巻の書簡大全集。現在も発見された新資料が追加されている。〔本稿の書簡引用は本書による〕

Friedrich Seebaß: Adalbert Stifter Briefe. Hrsg. von F. Seebaß. Tübingen 1936.

本格的書簡集。あとがきも僅かで、PRA 書簡集縮約版。序文に詩人への偏愛が見られる。

Karl Privat: Adalbert Stifter, sein Leben in Selbstzeugnissen, Briefen und Berichten. Berlin 1946.

第二次世界大戦後初の評伝だが、豊富な書簡を資料として用いている。

Moriz Enzinger: Ein Dichterleben aus dem alten Oesterreich, ausgewählte Briefe Adalbert Stifters. Innsbruck 1947.

178 通を収めた注解付きの本格書簡集。1947 年刊で世にあまり知られていない。

Gerhard Fricke: Adalbert Stifters Briefe. Nürnberg 1949.

袖珍版の書簡選集。1949 年刊なので質素な体裁で、選出された書簡数も簡潔。

Gustav Wilhelm: Adalbert Stifters Jugendbriefe 1822-1839. Hrsg. von Moriz Enzinger. Verlag Stiasny, Graz-Wien-München 1954.

戦後の研究でまず注目された若き日のシュティフターを伝える書簡集。

Kurt Gerhard Fischer: Adalbert Stifters Leben und Werk in Briefen und Dokumenten. Insel Verlag Frankfurt a. M. 1962.

497 通も収めた資料集だが、多くは書簡で、1960 年代では重要な資料であった。

Werner Welzig: Adalbert Stifter, Die kleinen Dinge schreien drein. 59 Briefe. Ausgewählt und herausgegeben von W. W. Insel Verlag Frankfurt a. M. 1991.

59 通を収めた 1991 年の版だが、最近の有力な参考資料の一卷。

- (2) Brief an Sigmund Freiherr von Handel; 8. Februar 1837. Br. Nr. 21, XVII, S. 65.
- (3) Brief an Gustav Heckenast; 17. März 1866. Br. Nr. 685, XXI, S. 174.
- (4) Alfred Doppler: Adalbert Stifter als Briefschreiber. In: Stifter-Studien. Ein Festgeschenk für Wolfgang Frühwald zum 65. Geburtstag. Hrsg. von W. Hettche, J. John, u. S. von Steinsdorff, Tübingen 2000, S. 244-254. Alfred Doppler: Adalbert Stifters Briefe als Dokumente der Selbstdarstellung. In: Stifter und Stifterforschung im 21. Jahrhundert-Biographie-Wissenschaft-Poetik. Hrsg. von A. Doppler, J. John, J. Lachinger u. H. Laufhütte. Tübingen

- (M. Niemeyer) 2007 S. 1-12.
- (5) 慶應義塾大学「教養論叢」第99号・1995年3月刊：Adalbert StifTERS Leben und Dichten, aus : Ein Dichterleben aus dem alten Oesterreich. Ausgewählte Briefe Adalbert StifTERS. Hrsg. und eingel. von Moriz Enzinger. Verlag Wagner, Innsbruck 1947, S. 7-25.
- (6) K. アーマンはこのシュティフターとヘッケナストとの作家と出版者の関係を経済の面から捉え、安易な友情に美化することに警鐘を鳴らして、有力な一石を投じている。Klaus Amann: Stifter und Heckenast. Literarische Produktion zwischen Aesthetik und Oekonomie. In: VASILO 27・1978 1/2 S. 47-58. [小名木 榮三郎 訳『シュティフターとヘッケナスト——芸術と経済のはざまに揺れる文学作品』] 未刊。
- (7) かなり積極的にシュティフターの書簡について考察を発表しているのは、新全集の編集に当たるアルフレート・ドップラーである。特に書簡を六項目に分けて論じ、紹介しているが、文学作品のみへの照明は与えていない。1. 作家の経済状況の報告。2. 学校行政や視学官としての報告。3. 政治や文化政策についての書簡。4. 画家、銅版彫刻家との往復書簡。5. 勤務上の個人宛文書。6. 純粹に個人的な心情吐露の手紙。Alfred Doppler: Adalbert Stifter als Briefschreiber. In : Stifter-Studien. Tübingen 2000, S. 245.
- (8) ここに記述された内容は、年月日などに誤りの多いのが気にかかるところだが、後にこの書簡を基にして、マイナートは Der Wanderer 誌 36 卷, Nr. 11; 13. Jänner 1849 に「アードルベルト・シュティフターの伝記スケッチ」Biographische Skizze Adalbert Stifter (Moriz Enzinger: Adalbert Stifter im Urteil seiner Zeit, Wien 1968, S. 137f.) をまとめている。またシュティフターの自伝的記録は死の直前にアーヘンの編集者レーオ・テペ Leo Tepe 宛に書いているが、これは書簡の形式を取っているものの、多くは他人の手によるとされ、手が加えられている。
- (9) 雑誌への発表を年表で示すと「人気作家シュティフター」の具体像が見えてくる。
- 1840 : Der Condor, Das Haidedorf, Feldblumen
- 1841 : Die Mappe (I Die Antiken, II Der sanftmütige Obrist), Der Hochwald,
Die Mappe (III Die Geschichte der zween Bettler)
- 1842 : Die Mappe (III Scheibenschießen in Pirling), Abdias, Die Narrenburg
- 1843 : Wirkungen eines weißen Mantels, Der späte Pfenning, Brigitta,
Das alte Siegel
- 1844 : Die drei Schmiede ihres Schicksals, Studien 1. u. 2. Band, Der Hagestolz
- 1845 : Die Barmherzigkeit, Der Waldsteig, Die Schwestern, Der beschriebene Tännling, Der heilige Abend

- 1846 : Zuversicht, Der Waldgänger
- 1847 : Der Tod einer jungen Frau, Studien 3. u. 4. Band, Studien 1. u. 2. Band, 2. Aufl.,
Prokopus
- 1848 : Der arme Wohltäter, Studien 3. u. 4. Band 2. Aufl., Die Pechbrenner
- 1850 : Studien 5. u. 6. Band, Studien 1.-4. Band 3. Aufl., Studien 5. u. 6. Band 2. Aufl.
- (10) 気分の違いを表すように、呼びかけが年とともに微妙に変化している。
Euer Wohlgeboren, Verehrter Freund, Hochgeehrter Freund, Theurer Freund,
Verehrtester Freund, Hochgeehrter theurer Freund, Liebster theurer Freund,
Liebster Freund, Theurer Freund, Lieber theurer Freund.
- (11) 『習作集』第1、2巻に好意的だったランデスマンは、後の作品には厳しい眼を向
けている。PRAの註は二人の間の意見の対立を手短かに描いて見せる。(PRA, XVIII;
S. 390 f.)
- (12) Allgemeine Zeitung Nr. 174, 1847年6月23日; Moriz Enzinger: Adalbert Stifter im
Urteil seiner Zeit. Wien 1968, S. 106 f.
- (13) 雑誌稿と書籍稿の頁数からもその増加ぶりは容易に把握できよう。
『老独身者』97⇒129(133%に増加); 『森の小道』27⇒68(246%に増加);
『姉妹』139⇒161(172%に増加)
このほかにも『書類綴じ』は243%に、『アプディアス』は196%に、と増加が眼
をひくが、シュティフターの場合には切り詰めるよりも拡張が多い。
- (14) 「シュティフターの作品の評判とともに『イーリス』への評も連動し、これまで
は下がったことはなかった。[……] しかし今回問題となるのは第一章の長々とした
自然の描写であり、この作家の病的現象と思われる。さらに物語のテーマも13年に
わたる幸せな夫婦生活の後に、子供のないことで離別するという、モラルに反する
筋の展開である。これはシュティフターの青春時代の回想の上に成り立つものであ
るし、結婚と子供の出産という倫理上の観点を、世の人口増の原動力としか見ない
ことによって、結婚とはより高貴なもの、より精神的なものであるということ、
この純潔な作家に見るわけにゆかなくなる。作品の構造も、第一章では自分の郷土
オーバーエーストラヒおよび隣接するバイエルンの、マニアのような地域描写を
見せるだけに終わっている。」(要約)(Der Humorist, 27. Nov. 1846. In: Moriz Enzinger :
Adalbert Stifter im Urteil seiner Zeit, Wien 1968, Nr. 72, S. 90)
- (15) Heinrich Laube in der Allgemeine Zeitung: In: M. Enzinger: A. Stifter im Urteil seiner
Zeit. Nr. 87. S. 96 f. 「森の自然描写は素晴らしいが人物は添え物に過ぎない。」 a. a. O.
Nr. 76; Allgemeine Theaterzeitung, 15. Dez. 1847 und Nr. 77; Wiener Zeitung, 18. Dez. 1847.

(beide S. 92)

- (16) Der Humorist, 9. November 1847 in : M. Enzinger: A. Stifter im Urteil seiner Zeit, Wien 1968, Nr. 109; S. 119 ff.
- (17) ibid; Nr 44, S. 65
- (18) 初稿から作品集への入念な feilen「磨き上げ」の実情については、拙論が詳しく論じている。クリスマスに起こった幼い兄妹の遭難かと心配した事件を描く『聖夜』と、自然に守られた幼児を取巻く自然環境と救済を、緩やかなテンポの叙述で対照的に見せる『水晶』は、作品集『石さまさま』の基調となる「恐ろしい力の世界から、穏やかな自然の流れへ」を文体にも見せ、後の時代にも変わらぬ好評を得ている。「文体の変容と自然描写——『聖夜』から『水晶』へ——」：小名木榮三郎著『自然と対話する魂の軌跡——アーダルベルト・シュティフター論』〔慶應義塾大学法学研究学会叢書 別冊 11 号平成 6 年 (1994) 刊〕 S.43-85.
- (19) Adolf Zeising: Bunte Steine A.Stifters. In : Blätter für literarische Unterhaltung, 13. August 1853, In : Adalbert Stifter im Urteil seiner Zeit, Wien 1968, S.199 ff.
- (20) 筆者は 1991 年にプラハ国立図書館のシュティフター・アルヒーフで自筆原稿を見る機会を得た。中でも晩年の『あとつぎ』Nachkommenschaften の見せる直しの執念の深さは、黄ばんだ古い遺稿からも強く訴えるものがあつた。
- (21) Walter Hettche: "... die letzte Ausfeile ist das feinste, und bedingt die Schönheit allein." Stifters Arbeit an den Bunten Steinen und ihre Dokumentation in der HKG. In: Jahrbuch des Adalbert-Stifter-Institutes 1, 1994. S. 77-85. / Johannes John: Aktuelle Probleme der Stifter-Edition am Beispiel der Erzählung "Der fromme Spruch" (1867). Darin seine neuen Beiträge der Editionsprinzip. In: Begegnungen mit Adalbert Stifter, Hrsg. von K. Allgaier u. J. Schreier, Aachen 2006, S. 9 – 28.
- (22) シュティフターの短篇小説を掲載した雑誌：
Wiener Zeitschrift für Kunst, Literatur, Theater und Mode, Wien (6 回) / Taschenbuch. Iris für das Jahr 1841. Pest (Heckenast) später als Deutscher Almanach (7 回) / Taschenbuch: Oesterreichischer Novellen-Almanach, 1843, Wien; Gedenk mein! 1844, Wien; Obererennsisches Jahrbuch für Literatur und Landeskunde 1845, Linz; Die Gegenwart 1845 Wien; Rheinisches Taschenbuch 1846, Frankfurt am Main; Austria, Oesterreichischer Universalkalender 1848, Wien; Vergißmeinnicht. Taschenbuch 1849, Leipzig; Libussa. Jahrbuch 1852, Prag; (主要作品に限る)
- (23) 作品は初め好意をもって迎えられたが、冷たい批判を浴びるようになった。『書類綴じ』へのヘムゼンの言葉は厳しい。「眠気を誘う文章の極限を造型した完璧な実

例であり、ただらと間延びした流れは、素朴な調子で歌うホメーロスの叙事詩の模造品と見る。」 Wilhelm Hensen : Adalbert Stifter. In : Blätter für literarische Unterhaltung, März 1851, Leipzig; In: : A. Stifter im Urteil seiner Zeit. Wien 1968, S. 156.

- (24) 筆者も 1974 年 6 月にヴェルヴェデーレに近い質素な住まいを訪れた。Beatrixgasse 4 b の 11 号室である。階段を 5 階まで昇り、シュティフターが日夜窓から遠望して描いた都会の屋根の波「ベアトリックス街風景」Blick in die Beatrixgasse を眺めて、夢多くして貧しい作家の若き日々を想った。
- (25) Adalbert Stifter: Die Pechbrenner, mit einem Nachwort von Johann Lachinger. Verlag publication PN°1, Freistadt, ohne Jahr (2001) S. 58 ff.
- (26) Thomas Mann Tagebücher 1940-1943 Hrsg. von Peter de Mendelssohn, Frankfurt a. M. 1982, S. 162 u. a. 「トーマス・マンとシュティフター」: 小名木 榮三郎著『自然と対話する魂の軌跡——アーダルベルト・シュティフター論——』平成 6 年刊 S. 294-298.